刊行の辞

橋本　明

崔書勉滞日三十年記念文集をひもどくと刊行の辞を寄せた木内信胤さんは「これから何を為しえるか、自分はなにを為すべきか」という崔さんの自問に対して、「多くの日本人が理解するのでなくては、何をなされようともうまくゆきますまい」と答えている。崔さんと日韓関係に幸があるよう祈ってのお言葉であったが、最近の両国は表向きどうしようもないほど凍っている。

崔さんも私どもも心を新たに日韓友好の実を挙げる道を真摯に求めなければ、と思う。崔さんを迎えて開催している日韓談話室は日本人にとっては学びの場であり、ご本人にはくつろぎと癒しの貴重な機会であろう。寺田佳子さんという稀有な世話人の尽力無しには味わえない特別な空間が、日本に存在している事実を、今後も大切にしたい。

崔書勉博士を語るとき、特にソウルを訪ねた折必ず金鐘泌さんに迎えられ、食事を挟みながら親しく会っていただいたことに感謝している。時に重要人物紹介では国会文教委員会委員長だった陸寅修さん、あるいは朴槿恵さんと相手は変わったけれども、二度国務総理を勤められた金鐘泌さんの重みは辺りを払う趣があった。

小人数の談論を好まれた金元総理が二〇〇二年十一月十一日来日されたとき、一九六二年十一月十二日東京で行われた「金・大平会談」の真実を明らかにした。崔書勉博士の努力と献身がなければ決して知りえること叶わなかった歴史的証言に触れて、記録としておきたい。

キューバ危機の折アメリカにいた金中央情報部長だが、国家再建最高会議議長朴正熙から対日請求権問題を解決してこいといわれており、帰途日本に寄った。事前に「八割くらいもらえればいいでしょう」という金部長の腹案を飲んでくれたことから、夜八時ころから外務大臣室で三時間半大平正芳外相と話し合った。

「一体日本はどれくらい韓国に提供できるのか言ってくれ」、金鐘泌にせまられた大平は「ウーとかアー」とか唸っているばかり。ついに、訪欧に出かけた総理が八千万ドルという線を出していったと口にした。「そんな金額ではダメ」「いやこれ以上は出せない」とせめぎあった末豊臣秀吉の人生観「鳴かぬなら鳴かせてみよう」を持ち出した。「貴方はどこからそのような言葉を習ったのか」と驚きの表情を見せた大平はやや和み、軍人が近代化のために必死で立ち上がった軍事革命の内容に耳を傾け始めた。

「一生懸命国を立て直す。そのためにはアメリカでなく日本が一つ協力してもらいたい。日韓は歴史上いろいろあったが、地球に存続する限り互いに隣同士で仲良くしなければならない。そういう運命を背負っている両国だが日本は私の調べでは外貨預金を十四億ドル持っている。みんなくれとは言わない。韓国のような後進国が経済建設するために何が必要か、兄貴分の日本は必要な経験も知識もやり方も持っている。八千万ドルではだめだ」金は言った。大平は「ホウ、ホウ」と熊みたいに室内を歩き出す。座りなおした大平は「どうか聞かしてくれ。ずばり解決できる条件を君の口から言ってくれ」そう重ねた。

日本に来る機中はじいていた数字を金鐘泌が明らかにしたのはこの時点であった。「無償三億、対外協力基金から有償二億。さらにケースバイケースで輸銀から一億ドルプラスアルファ」そうしたら大平はまた立ち上がり思い悩んだあとコーヒーを出してきた。

「私も腹を据えた。どんなに非難を受けても貴方の熱意に動かされた。一緒にこの問題を解決しよう。それでこういう具合に修正したらどうか」と逆提案した。「この無償を有償に、有償部分を無償に変えるわけにはいかないか。有償といってもほとんどタダですよ」

国に戻れば売国奴呼ばわりされることは覚悟の上だったのだろう、金部長はある意味で大平に助け舟を出す。日本側が請求権という言葉に反発していることを知ったとき、「私は韓国国会に請求権という表現をするが、貴方は経済協力といえばいいではないか」と。

二人はメモ用紙二枚を手にした。二人が書いたものは同文だが数字だけだった。3、2と。無償三億米ドル、海外協力基金から有償二億ドル、輸銀から一億ドル、さらにプラスアルファという枠を間違わないよう見せ合って確認し、それぞれ持ち帰るのだが、メモに記された数字は三億と二億だけだったのだ。十年間で毎年五千万ドルづつ支払うことで合意し輸銀融資を含めると八億ドルという概念がこの会談で固まった。当時韓国外相が米政府から借り出した国の運営資金は二千万ドルにすぎず、比較するととんでもない大きな金額だった。朴正熙大統領はこれを資金として工業化など近代化を緒につかせたのだった。

私が直接メモった紙数はA四型でびっしり七枚に達する。歴史は人間がつむぎだすという事実を雄弁に物語る内容だ。それもこれも崔書勉さんのおかげであり、私たちがじかに学ぶことを得た日韓交流史の一例である。華々しく歴史を飾った政治、経済、学会、社会上の人物群像がこの世を去っていったなかで、崔書勉さんは不老不死の境地で健康な日々を一人送る。

今後はただ存在していてくだされば いい。健康で……。